



# タコと紙芝居とテングサと

新垣 夢乃 (非文字資料研究センター 研究協力者)

タコ、紙芝居、テングサ。なんのことかという、私が調べてきたことの変遷です。以前、勤務先の上司には「いったいどうつながるんですか？」と質問されて困ったこともあります。このなんだかわからない組み合わせの背景には、通称「非文字」(非文字資料研究センター)があります。

私は、学部時代は民族(人類)／民俗学を専攻するゼミに所属していました。大学院へ進学した当初、興味を持っていたのはタコが海底の穴を住処とする習性を利用したタコ漁において、人々はその穴をどう利用し、どう管理し、どう継承してきたのかということでした。そこから、各地域において実践されてきた資源管理がどう失敗し、どう成功したのかを知りたいと考えていました。

なにぶん貧乏院生のことでしたから、日本全国の事例を調べてみたいという思いはあったものの、実際には実家のある地域で調査して修士論文をまとめようと考えていました。しかし、大学院へ進学して間もなく、非文字には「奨励研究」として院生向け競争的研究費があることを知り、早速応募しました。幸運にもこれをもらうことができ、日本海沿岸地域でも調査を行うことができました。

最初の競争的研究費を獲得することが、次につながるというのはよく言われることですが、非文字で競争的研究費を獲得するノウハウを学んだことで、大学院在学時にはいくつかの研究費を獲得することができました。そのおかげで、博士課程に進学することができ、最終的にはタコ漁をテーマに博士論文を書き上げることもできました。

ところで、タコは世界中に生息しています。それでは、海外ではどのようなタコ漁が行われ、どのように資源管理がなされているのかということが気になるようになりました。そんななか、さらに研究費を獲得して、台湾の澎湖諸島などへ調査に出かけるようになりました。

こんなふうには台湾と研究上のつながりを持ちはじめた2014年の春、私はちょうど博士課程3年次で、博論に悪戦苦闘している真っ最中でした。急に非文字から呼び出され、戦時期の紙芝居に関する共同研究を立ち上げると告げられ、そこに参加することになりました。このメンバーには、かつて非文字で事務室長を務めていた原田広氏もいました。まさか、自分が奨励研究の応募書類を提出し、会計処理などでもお世話になっていたその原田氏とともに研究を立ち上げ、それから7年以上も共同研究を行うことになるとは、思えば不思議な縁です。

さて、紙芝居の研究といっても、ここまでお読みいただいたとおり私が調べてきたのはタコのことです。これは困った、どうしたら共同研究に貢献できるものかと考えていました。そこで、台湾のタコ漁に関連する資料を調べたことがあった国立台湾図書館のデータベースに「紙芝居」と打ち込んでみると、日本統治期の紙芝居がいくつかありそうということがわかりました。それをきっかけに、日本統治期の台湾の紙芝居を調査対象とすることで、自分でも共同研究に貢献しようと取り組んできました。それらの調査の成果は、安田常雄氏の「戦時下日本の大衆メディア研究 台湾・福岡調査報告」(『非文字資料研究センター News Letter』34、2015年)、鈴木一史氏、松本和樹氏の「戦時下日本の大衆メディア



写真1 タコ穴のタコを突く様子



写真2 突き獲られたタコ



写真3 調査に関する現地での報道

出典 南投新聞 NTNews 2016年11月10日

<https://www.youtube.com/watch?v=UXeKvEA7uyQ>

(2021年9月20日参照) (本写真の掲載にあたっては、「鑫傳國際多媒體科技股份有限公司」より多大なご協力をいただきました。ここに感謝を申し上げます)



写真4 山口正明作の『君ヶ代少年』

出典 賀来猛夫『紙芝居の演出法 台湾に於ける其の運動』台南紙芝居研究会、1941年：巻頭冒頭部分より引用

研究 台湾調査報告」(『非文字資料研究 News Letter』35、2016年)などにまとめられています。

台湾に調査対象を拡大したことも手伝ってか、2016年9月から私は台湾嘉義県にある呉鳳科技大学に勤務することとなりました。なにがどう転んで吉と出るか、わからないものです。しかし、台湾で暮らすようになると、日本統治期の台湾で演じられた紙芝居についての見方も次第に変化してきました。それまでの私は、台湾の紙芝居とは、台湾総督府が戦時期に教条的な文言を並べてつくったものだと単純に理解していました。しかし、いざ自分が台湾で教壇に立ち、学生たち向けに「日本語」や「日本文化」を教える立場になると、かつて多くの紙芝居をつくり、それを教材として、台湾の子どもたちになにごとかを伝えようと試み、どう伝えようかと悩んだであろう日本人教員たちのことが気になりはじめました。考えてみてください、現代のようにインターネットで簡単に日本の写真や動画を授業で使用できるのならともかく、それがないなかで異国の地で異文化の持

ち主たる子どもたちに、「日本」を伝えるのがいかに困難であるかを。そのような状況のなかでは、紙芝居は教室で使用できる当時最新式のメディア・プレーヤーであり、なおかつ異文化教育のツールであったわけです。実際に、台湾において最も早い時期から紙芝居を教育現場に持ち込んだ山口正明は、次のような教育現場での悩みを吐露しています。

文化の発達してゐなかつた刺戟の少なかつた封建時代の子供であるならば、口一つ或は白墨一本で十分な効果があげられたも知れませんが、現在の様な文化の進んだ時代にさうした単純な抽象的な方法では徹底を期することはできません [末広公学校紙芝居研究部編『社会教化と紙芝居』三榕会、1939年：109頁]。

殊に公学校の児童は、物語を聴いても、それが外国語の位置にある国語であるために、理解出来ない言葉が非常に多く、低学年に到つて更にさうである。従つて単に童話をきかせるだけだと、案外興奮もしてくれず、感激もなく、あつけない事がしばしばあるが、紙芝居は耳と眼で理解して行けるので、言語の障害は容易に除かれてしまふ [山口正明『教育紙芝居に就いて』『台湾教育』第428号、1938年：11頁]。

これらの言葉からは、山口が文字や語りのみの教育に限界を感じ、リアルなイメージや生きられた感覚を伴った日本語を台湾の児童に伝えたいという思いが見て取れます。山口の言葉を借りれば、それは子どもたちにどうにかして「感激」を伝えたいとの悩みでした。

山口は、1934年頃から台湾の教育現場に紙芝居を導入しましたが、その後、戦争が激化すると皇民奉公会に籍を移し、紙芝居を使用した皇民化運動に携わることとなります。

台湾の地で台湾の子どもたちに日本語の「感激」を伝えようと努力した山口は、日本の敗戦後、山口県で国語と音楽の教員を続けました。しかし、戦後、山口が台湾での経験を語った資料は見当たりません。戦後の山口は、次のように語っています。

結局愛国心は、個人、郷土、国家、世界へと拡大しても妥当であるところの愛情であるべきで、かゝる愛国心は国民にとつて必要なものであると、私は言いたいのである [山口正明『「愛国心」への批判』『新光』第14号、1951年：48頁]。

我々は流行歌の抒情性を否定しながらも流行歌を歌わないではおれない。民族の血が流れている限り逃れることのできない宿命ですね [大野豊、藤本あさ、山口正明、栗栖悦女、西本蒼天、三隅男治、江本千代子「抒情について」『曲り角』第9号、1961年：22-



23 頁]。

そして、山口は各赴任先の地域にあるわらべ歌に教育的価値を見出しています。

わらべ歌から生活の歌へ、みんなが楽しく力強く歌うことによって生活を強く、リアルなものにし、またそのリアルな感動から次第に音楽の形式、技術を吸収しマッチさせてゆく時、音楽を学ぶという知的な無感動なものから脱却して、生活を歌い生活をたかめてゆく真の音楽教育の目的が完成されるのだと思います。

また日本の生活から生れたわらべ歌を大事にし、日本の国に生れた音楽を大事にして、これをどのように高め発展させ世界的なものにするかということを考えねばならないと思います [山口正明「生活の歌による生活の高まりを」『教師の実践記録：音楽教育』三一書房、1957年：196-197頁]。

このように、「感激」の共有を教育の根幹においた山口は、台湾ではその共有の難しさに直面し、苦闘しました。一方、戦後の山口は教育において、地域社会の「生活の中」で生まれたリアルな「感動」に注目することになっていきます。山口はそれを形式的、技術的な面で補うことによって、教育における知的「感動」を得られると考えました。山口にとって同じ日本人である以上、言葉や文字、音楽といった通常の教育さえ施せば、すぐに「民族」としての「感動」を理解し、互いに共有することが可能はずだと考えたのです。つまり、戦後、台湾から日本に戻った山口にとっては、「民族」としての「感動」は全くもって所与のものとして想像されるようになってしまったのです。

山口が台湾で行ったことは、現代の目からみれば同化政策への積極的な協力です。しかし、それは、教室で目の前にいる台湾の子どもたちに日本語の、日本文化の「感激」をどうしたら伝えられるのかという素朴な思いから発展したものでした。そして、山口は、この素朴だが困難な目標のために苦闘するなかで、紙芝居を生み出し、活用したのでした。そこには、異文化コミュニケーションの一つの実践を見ることができます。しかし、戦後の山口からはその実践が抜け落ちてしまったのです。

このことに気づいたとき、私は恐ろしくなりました。なぜなら、私も山口と同じく呉鳳科技大学を辞した後は日本に戻り教員を続けており、台湾の教育現場で直面し苦闘した深い理解へ至ることの困難さをどのように受け止めてきたのかと問われているように感じたからです。日本に戻った後、私は台湾での経験を買われてか台湾の「海女」に関する共同研究に参加するようになり、日本統治期の台湾のテングサ漁場の管理やテングサの流通について調査するようになりました。これは、当時、台湾のテングサ漁場に台湾の人々だけではなく、沖縄人、日



写真5 台湾に自生するテングサ



写真6 台湾「海女」のテングサ漁

本人が重層的に関与し、テングサが沖縄、日本、中国大陸、欧米諸国へと流通していく複雑さを読み解く楽しさがある研究です。しかし、私の脳裏には折に触れて山口正明の影が思い浮かびます。そして、「お前は一体なにをしているのか」と問われているように感じるので。

ふりかえってみると、私の研究生活は、スタートから現在まで非文字が隣にあったようです。非文字のおかげで調査地のみならず、研究テーマも広げることができたと考えています。そして、私自身の研究・教員生活とプライベートな経験が、非文字で研究するなかで知った山口の経験と重なり考えさせられるような結果となりました。私は山口から、節目節目で私をチクリと刺し、反省を促す小さな棘のようなものをもらったように感じています。非文字で行っている紙芝居研究も現在、3期目の終盤に差し掛かっています。なんとか、この棘に向き合った紙芝居研究の成果を残したいと考えています。

【引用文献】

- 賀米猛夫『紙芝居の演出法 台湾に於ける其の運動』台南紙芝居研究会、1941年
- 山口正明「教育紙芝居に就いて」『台湾教育』第428号、1938年
- 山口正明「『愛国心』への批判」『新光』第14号、1951年
- 山口正明「生活の歌による生活の高まりを」『教師の実践記録：音楽教育』三一書房、1957年